

BDFを除雪車燃料に

マルオ建設工業

厳冬期の旭川で試験開始

旭川市報 2008-1-23 (土)

【旭川】燃料代高騰により、建設業界も経営が圧迫される中、旭川市の永山地区総合除雪を担うマルオ建設工業（本社・旭川）は、バイオディーゼル燃料（BDF）を除雪ローダーとタンクカーに使用する試験を開始した。単価が安く経済的なほか、天ぷら油など廃食用油からつくられた環境



BDFを使う除雪車。気温が零下20度以下になる旭川市内で試験を始めた

にもやさしい燃料。小田隆造社長は「BDFは、大型建設機械・車両での十分な使用実績はまだないが、企業努力で少しでもコストを抑えるため、厳冬期の旭川で除雪に使えるのかを試したい」と話している。同社は重機やタンクを計240台保有し、全国で稼

働させている重機建設会社。冬季は旭川市内で地区総合除雪の代表を務めるほか、全道の大手スーパーや遊技場などの駐車場除雪も請け負っている。

「昨季は除雪ローダー1台当たり1カ月30万円程度の燃料費だったが、今季は50万円ほどに上がっている。1回の除雪に200リットルは使うので、大きな出費」と、最近の燃料価格高騰に頭を痛めていた小田社長。コストダウンの一環として、BDF使用の挑戦を決めた。

BDFは、化石燃料に比べて二酸化炭素などを削減でき、廃油のリサイクルにもつながる。使用するのにはペカルト化成（本社・旭川）が製造・販売しているもので、1リットルあたり105円（税

込み）。

車検証の燃料項目を変更さえすれば、一般のディーゼル車にそのまま使用できる。軽油は混合していないが、改良を加えた冬季仕様なので、氷点下でも使用可能だ。

ただ、大型建設機械などの使用実績がないため、除雪作業で採算が合うかは試験の結果次第。16日の夜間から除雪ローダー1台と10トタンクカー1台で燃費や性能は十分に出るのかなど、データをとりながら市道の除雪作業で試している。

小田社長は「除雪は市民の足を確保する重要な役割。厳しい経営環境でもコスト削減に取り組んで、仕事をまっとうしたい」と意気込んでいる。